ダンス・イン・ザ・マフィア

ダンス・イン・ザ・マフィア　1

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18991667

モ腐サイコ100, 霊幻総受け, モ腐サイコ小説100users入り

誰得？俺得！なマフィアパロです。師匠総受けです。暴力描写や殺人描写を含むことになります。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

ダンス・イン・ザ・マフィア　１

「伝説の暗殺者を知っているか？」
「黄金の髪をした、とろける様な白い肌の男娼だ」
「有名になりすぎて、一目でソレと分かるらしい」
「でも、ソイツに愛を囁かれたら──」
「死神からの一撃が待っていると分かっていても、ベッドに沈まずにはいられないんだとさ」
「一度お目にかかってみたいもんだね、死んでもいいほど魅力的な色男なんて──」

※※※※※

「くあ……」
よれよれのトランクスに、首元がだるだるになったタンクトップを着た冴えない男が、眠そうな目を擦りながら豪奢な洗面台に向かう。
「その情けねぇ寝衣なんとかならねぇのか、ドン」
渋い男前が、黒いオーダーメイドのシチリア映えしそうな高級スーツで背筋を伸ばしてタオルを手にしている。
欠けた左耳がこれまでの武勇を匂わせる暴力の装いが似合うそのコンシリエーレは、エクボといった。
「シルクのバスローブでも着ろってか？バカ言えよ、うちのファミリアはどんだけ金欠だと思ってんだよ。いいんだよ、暗殺者が乗り込んできたってドンだってバレないから」
寝起きでは冴えない男だったドン──霊幻は、顔を洗ってその箱舟のようにミステリアスなアジア系の目元をぱっちりと開かせ、髭を剃って美しい白磁器のような口元をあらわにして、イタリアでは異様な姿を徐々にみせていく。
エクボと同じ店で仕立てた灰色の高級スーツに身を包めば、『ある意味で』有名なマフィア、レイゲン・ファミリアのドンにふさわしい風格になった。

「おー、やっと部下に見せても大丈夫な姿になったな」
「ロメオ（色男）って素直に言っていいんだぜ？」
「ロバ男？」
馬鹿にしたように鼻で笑うエクボに霊幻は口を尖らせる。が、いつもの軽口はここまでだ。
「――俺の娼館にドラッグを流してる馬鹿は見つかったのか？」
霊幻が経営している娼館は五つ。このマフィア無法地帯であるチョウミ・チッタで全ての娼館はレイゲンファミリアが持っている。
レイゲンファミリアのシノギは主に娼館経営、一軒のカジノ、そして用心棒稼業であった。ドラッグと殺しは御法度、という甘っちょろい矜持を掲げているこのマフィアは、それだけふざけたことをのたまっているにも関わらず、存在し続けていることが『ある意味有名』なのである。
「ああ。トミーがふん捕まえて、アジトまで連れてきてる」
「よだれが出るような美女ならいいんだがなあ」
「ある意味よだれが出そうな豚だぜ」
朝からクズの醜男を見なくてはいけない霊幻はうんざりした顔をする。
「芹沢はいるか？」
「子供達のおもちゃになってた」
毛足の長い絨毯がひかれたドンの領域を出ると。
そこは孤児院だった。
「レイゲン先生！」
子供達が飛び付いてくるのを、おっと、と霊幻がよろめきながら受け止める。
総勢約１００人の子供達を抱えるこの孤児院は、娼婦が産んだ子供達が半数を占める、霊幻の趣味の箱庭である。
なお、ファミリアが金欠になる原因だ。
「師匠」「霊幻さん」
ととと、と上等な子供服を着た１４才ほどの子供が２人、霊幻に駆け寄ってくる。訳ありで霊幻がファミリアに引き入れ、孤児院で暮らしている元暗殺者の子供達だ。
兄だと名乗ったおかっぱの少年が茂夫、弟だと自称している美少年

が律だ。年頃になってきた律に、当時所属していたギャングのボスが手を出そうとして、怒った２人がギャングを壊滅させてしまい、路頭に迷っていたところを霊幻が拾った……ということになっている。
「師匠、師匠だけで大丈夫ですか？仕事なら僕たちも連れて行ってください」
「これから学校だろ？仕事なら大人に任せておけ。芹沢にも付いてきて貰うし……」
「アンダーボス（ドンの次に偉い）にですか！？」
「……仕方ねぇだろ、ウチは人手不足なんだからよ……」
「それならそれこそ、僕たちを連れて行ってください。僕たちはもう立派なソルダート（兵隊）です。お役に立ってみせます」
霊幻は困ったように微笑んで、兄弟の頭に手を置く。
「言っただろ。お前たちはこの孤児院のカポ（リーダーみたいなもの）だ。孤児院をしっかり守ってくれ。勉強したり遊んだりしながらな！」
にっと笑う霊幻に兄弟は不服そうだ。
「子供がマフィアの仕事なんかするもんじゃねーよ。もし俺を手伝ってくれるなら大学出てから考えてくれ」
「大学なんて、そんな贅沢な！ドン、あなたは本当に甘過ぎる──！」
「ほら律、チャイムが鳴るぞ！」
無理矢理に兄弟を学校に向かわせる霊幻。
入れ替わりに、大柄な短髪の日系男性が子供達を振り切りながらやってくる。
「子供達が俺をジャングルジム代わりにするんです。注意してくださいよ、霊幻さん」
人の良さそうな顔を困らせてドンに陳情するのが、アンダーボスの芹沢だった。
「そんなちっちゃい子に言っても分かりゃしないよ。ほら、おいで」
芹沢の頭にしがみついている子供を受け取って抱きしめ、霊幻は慌てて駆け付けた保育士に引き渡す。

「話は聞いてるか？大事な俺達の娼婦をシャブ漬けにした馬鹿に特別授業しにいく。道具は揃ってるか？」
「はい、もちろん。俺の『能力』も使えますが──」
「それは切り札だ。隠しておけ」
色々と。
この甘っちょろいファミリアがのんびりと存在できる理由の一つに、芹沢の『能力』があったりする。
「じゃあ、本部は任せたぞ」
「あいよ」
コンシリエーレのエクボに屋敷兼孤児院を任せ、霊幻は芹沢と２人、フルスモークの真っ黒なフェラーリに乗り込んだ。
何も言わず運転手は目的地に車を走らせる。
霊幻はカタ、と震える芹沢の手を目だけでチラッと見る。
「俺がやろうか、拷問」
「！大丈夫です、俺がやります」
芹沢は生来の気質が優しい。
「芹沢、マフィア辞めたくなったら言えよ」
向いてないんじゃないか、と霊幻は薄々思っていた。
「……大丈夫です」
ほんとかよ、と霊幻は心の中で疑いの声を上げる。
「俺に余計な恩義を感じなくていいんだからな」
「あなたに恩を感じるなという方が無理だ」
車が目的地について、苦笑しながら芹沢が先に降りて、霊幻をエスコートする。
「さぁ、俺のお姫様に毒林檎を食わせたお馬鹿さんは誰だ？」
霊幻は軽やかな声を出しながら元精肉店の冷蔵庫を開ける。
そこには不貞腐れた顔の、太った売人が縛られて部下に押さえつけられていた。
くす、と霊幻は微笑って。
「お前の『親』のことが知りたい。話してくれるよな？」
ギラりと拷問道具を芹沢が光らせる。
「そんな脅しで──」
「そういえば、『お前のお姫様』は、今年で７才だそうだな？」

はっと売人の男の顔が青くなる。
「む、娘に手を出さないでくれ──！」
「そぉんなこと俺は一言も言ってないぜ？でもそうだな、俺もマフィアだからなぁ──」
「許してくれ、俺の『親』はもういない。俺は脅されてるんだ。もう、これで俺は終わりだ」
ガタガタと震え出した売人に霊幻と芹沢は顔を見合わせる。
「現れたんだ、伝説の殺し屋、金の髪に透けるような白い肌の、『ミエーレ・ヴィリーノ』（毒蜜）が──そいつが俺の所のボスを殺して、実権を握ってる。この話をしたから、俺は明日には殺される……が、お前らも終わりだ！聞いたからには道連れだよ！……は、は、は！ざまあみろ！」
青い顔をひきつらせて引き笑いをする売人を、ぽかんと見つめる芹沢。

「ほーん？」

霊幻は面白そうに、唇に指を当てた。